

平家物語 敦盛の最期^{あつもり}

(口語訳)

波打ちぎわに上がろうとするところに、(熊谷は馬を) 並べてむずと組んでしょんと落ち、取り押さえつけて首を取るうと甲を仰向けにして(顔を) 見ると、年十六、七ぐらいの(若武者) が、薄化粧をして、歯を黒く染めている。わが子の小次郎の年くらいで、容貌がまことに美しかったので、どこに刀を突き刺したらよいかわからない。

「いったいどういふ身分のおかたでいらっしゃいますか。お名のりください。お助け申しましよう。」
と申す。

「おまえは誰か。」
とおたずねになる。

「名のるほどの者ではありませんが、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実。」
と名のり申しあげる。

「では、おまえに向かつては名のるまいぞ。おまえにとっては(私は) よい敵だぞ。名のらなくても首をとって人に尋ねてみる。(自分を) 見知っているであろう。」
とおっしゃった。

熊谷は、「ああ、立派な將軍だ。この人一人をお討ち申したとしても、負けるはずのいくさに勝つわけでもない。またお討ち申さなくても、勝つはずのいくさに負けることもまさかあるまい。小次郎が軽い傷を負ったのさえ、直実は(親として) つらく思うのに、この殿の父が、(わが子が) 討たれたと聞いて、どれほどお嘆きになることだろう。ああお助け申したい。」と思つて、後ろをさつと見ると、土肥、梶原が五十騎ほどで続いている。熊谷が涙をおさえて申したことはない、

「お助け申そうとは存じますが、味方の軍勢が、たくさん集まってきています。とうていお逃げになれますまい。他の者の手におかけするよりも、同じことなら、直実の手におかけして、死後のご供養をしてさしあげましよう。」
と申したので、

「ただ早く早く首をとれ。」
とおっしゃった。

熊谷はあまりにかわいそうで、どこに刀を突き刺したらいいかわからないで、目もくらみ正気もなくなってしまい、前後不覚に思われたが、そうしてばかりもいられないことなので、泣く泣く首を切ってしまった。

「ああ、弓矢ゆみやを取る身ほど残念なものはない。武芸の家に生まれていなければ、どうしてこのようなつらいめに遭あうことがあるのか。心なくもお討ち申したものだなあ。」

とくどくど繰くり返して、袖そでを顔に押しあててさめざめと泣いていた。やや長い時間がたって、そうしてばかりもいられないので、(大將軍の) 鎧直垂よろいびだたれをとって、首を包もうとしたところ、錦の袋に入れた笛を、腰こしに(この若者は)お差しになっていた。「ああかわいそうだ、今日の明け方、城の内で音楽がくを奏かなでいたのは、この人たちでいらっしやっただなあ。現在味方に、東国の兵は何万騎あるだろうが、いくさの陣じんに笛を持つ人はまさかあるまい。身分の高い人は、やはり優雅ゆうがであるなあ。」と言って九郎御曹司くろうおんぞうし義経よしつねに(首とともに笛を)お見せ申したところ、これを見る者は、みな涙を流さないということはない。

あとになって聞くと、修理大夫経盛しゅりのだいぶつねもりの子息たよりで大夫敦盛たいふといって、生年十七になっていらっしやった。(まさに) その時から、熊谷の仏門そつに入って僧そうになろうという思いはますます強くなった。